

心理小説の三つの型

析原 知雄

- I 心理小説とは何か
- II H. James の場合
- III J. Joyce の場合
- IV W. Faulkner の場合
- V 一応結語として

I

心理小説という云い方は曖昧である。小説は主に人間を中心としたものであるから、人間の心理を伝達しないものは、ほとんど、ない筈である。あらゆる小説は人間が出て来れば、人間とその心理を描くに相違ない。それであるのに、わざわざ、心理小説という名称でよぶのであろうか。心理小説と云ったカテゴリーをつくるのが、既に、人為的なことのように思われる。例えば、文芸用語辞典の類に示された定義らしいものには、満足な解説をあたえているものはほとんどない。

勿論、常識的には、事件を主としないで、人間の心理を重視した（近代）小説の事だとか、人間の心理を精密に解剖分析した小説とか、一口に云ってしまうであろうが、一応その通りではある。だが、これでは心理小説の特質はわからない。心理小説の「心理」とは何かと云う事、又、二十世紀初頭までの心理小説と云われるものと、それ以後の心理小説——「新心理主義」の小説とか、「意識の流れ」の小説とかよぶもの——との相違点とか、共通性とか云う事を考察してみなくてはならなくなるので、それが、この小論の主要点なのである。

その前に、二十世紀初頭までの心理小説と云われるものに就いて、簡単に——若し、これに関して、あらゆる場合を考慮して論述するとすれば、広汎で複雑な問題と化してしまうから——問題を制限して、二、三の例を考えてみるにとどめよ

う。英国では、心理小説の事を、概括的に云って、Psychological Novel と云うのだが、文学史的に云って、十九世紀の中葉に、女流作家として有名な George Eliot (1819—80) の書いた小説あたりを、よく心理小説とよんでいる。此の作家の先輩にあたる、やはり女流作家の Elizabeth Gaskell (1810—65) の書いた小説も此のカテゴリーのものともみることが出来よう。フランスでは、心理小説の事を、roman psychologique とか、同様の意味で roman d'analyse (分析小説) とか名づけている。フランス文学史によれば、フランスで心理小説とよばれる最初のもは、十七世紀初に書かれた Honore d'Urfé (1568—1625) の作品「l'Astrée」(1, 2, 3部は1607—19年に、4, 5部は作者の死後1627年に秘書 Baro により公刊されたもの) をあげている場合もあり、又同時代の Lafayette (1634—93) 夫人作で、人々のよく知る「クルーヴの奥方」「la Princesse de Clèves」(1678) をあげている場合もあるようである。アメリカでは、先づ Nathaniel Hawthorne (1804—64) をあげることが出来るであろうし、Henry James (1843—1916) の書いた小説（殊に後期の大作）は、心理小説の代表的なものときえ云える。

事件や、叙景の記述よりも、人間の心理を書くことを主としている小説と云っても、自伝的な告白小説——よく日本の私小説などにみるような、いわば、作者自身の個人心理の内面を表現したもの——でも、自分の心理を書いておれば、主

たる内容が、人間の心理だと云う理由で、心理小説とよべばよべぬこともなからうが、甚だ漠然としている。ここではそのような種類のものを考慮しないで進めて行く。そして、心理（或は心理主義）小説とは、どのようなものであるかを、いくらからでも、観念的な事象を具体的に解明する為に、その特質を指摘する為に、なるだけ作家と作品を限定して、例証的に、論述するのが適当な方法かと考えたのである。

文学作品に用いられる心理解剖の技術 (technique) を学問上の精密な心理学と同一視することは勿論、不可能だし、心理学と文学とは歴然と、その各々の機能を異にしていることに着眼すべきであるのだが、ただ、漠然と人間の心理を述べていると云うのではこまる。も少し方法的に人間の心理を記述し、解剖分析していて、文学の特質を失わぬものとしての作品を考えねばならない。又、人間の意識を取り扱う事が、二十世紀の新しい心理主義の小説では、大きな課題となっている訳だが、その意識の取り扱い方にも色々な方法があり、なかなか複雑多様であると言える、人間の言語になる前の状態の意識、或は人間の深奥の無意識に近い思想を取り上げることの困難さは勿論の事、完全には日常的に組織された意識、それが、小説に於ける行動や筋の発展に順応して相関関係をなしている意識でさえ、小説の技術として取り入れることは簡単な仕事ではない。それに、今世紀に入ってからの心理学の進歩と、又それとの密接な関係、或る場合はその影響と相俟って、複雑なしかし甚だ興味ある新鮮な課題を文学の研究者は提供されることになる。

筆者は、このような観点から、三人の心理小説の作者とその作品を取り上げて、心理小説の重要な一線をたどり、二十世紀初頭までの代表者として Henry James を考察し、二十世紀の新しい心理主義の作家から James Joyce と、William Faulkner をえらび、その特徴を追求し、三人の相違点なり共通点なりをいくらからでも解明してみたい。この三つの高峯をきわめることは、その脈絡の重要性から云っても困難ではあるが重要な仕事と考えられる。ただ、読者の方々におことわり

して置かねばならぬのは、此の三人の偉大な小説家やその作品の特質を述べるのでなく、心理小説としてみとめられる特徴を、その代表的な作品を取り上げて、それに関して論述するのであるから、この偉大な作家達には他の多くの特徴をも合せもつものである事を御承知願いたい事である。しかもその心理小説的特徴すらも、この小論では、筆者の微力と相俟って充分の追求をはたし得ないかも知れぬと云う事である。此の論題に関しては他日更に追求する積りである。

I

Henry James (1843—1916) は、文学経歴を重ねるにつれて、独自の小説の型をつくって行くことになるのであるが、所謂習作時代から、初期、中期にかけては、色々先達から学ぶところがあつた。又その影響とも思われるものを多分に受けたときえ考察し得る。(此の点については、拙稿「文学に於ける影響の問題——Henry James の場合」関西学院大学「英米文学」1) Vol. IV. No.1 と、「アメリカ人をどう読むか——Henry James のロマン主義と清教主義」関西学院大学「論攻」第7号2)掲載のものに、いくら解明したのである。) 先づ Nathaniel Hawthorne からは多くを学び取り (簡単に云えば、小説に於ける心理性と怪奇的傾向等)、George Eliot, Gustave Flaubert, Honoré Balzac, Alphonse Daudet そして Ivan Turgenev (Henry James は Turgenev を用いないで、Turgenieff の方を採用している) 等から小説の Technique (技法) を学び取つた。Turgenev からは文学に対する態度や、姿勢のようなものまで受け取っているようであり、Henrik Ibsen からは、所謂 James の劇作家時代とよばれる時期 (1890—95年頃) に、劇作技法を甚だ意識的に学び取っているようである。しかも、このような諸種の影響をみとめても尚且つ、James 独特のものが後期の作品には発見できる。

James の小説家としての最も特異な点は、小説と云うものを意識的に研究の対象としたことであり、又創作するに当って、小説の技法そのものの工夫を追求してやまなかつたことである。その

技法の特徴は、描く人物を困難で複雑な「場」に置いて、人物が、除々にこの「場」を意識して行く段階を心理的に描くことにあったのである。

James は、自分の描くべき対象をよくみきわめた。James の撰ぶ主題は何よりも「直観」から出発する。そして文学上の主題を与えた微妙で、錯綜する人間関係を、対象から離れて、客観的態度で観察して、事件や外面にあらわれる行動を主としないで、人間の内部動機を発見しようとする。人物の内部生活を探る糸をたぐって、その意識の流れの跡を追うことに全力をそそぐのである。この傾向は後期になるほど顕著になり、特異性をあらわすのである。自分の興味をひく人物を捉えて、その人物自身の世界の中で活動させ、作品の筋も人物が活動し続ける程度のものにしたのである。これは Turgenev の小説の技法を学び取ったと云えるであろう。人物の性格や心理を主としているのである。この傾向に James の初期の作品、「ロデリック・ハドソン」(“Roderick Hudson”, 1876)、「アメリカ人」(“The American”, 1877)、「デェイズイ・ミラー」(“Daisy Miller”, 1879)、「一婦人の肖像」(“The Portrait of a Lady” 1881)、「ワシントン街」(“Washington Square”, 1881) 其の他にみられる。此の期の小説には確かに視点の固定が、或る一人物を通して多いのである。例えば、“The American” では Newman の視点を通し “Daisy Miller” では Winterbourne の視点を通してみられるように。

ところが、大体 1890 年頃から、James は小説に James 独自の型をつくって行く事になり、此の頃から従来の作品の主題(或は素材)の方法に疑問を抱きはじめていたのである。此の不安の徴候とも云うべきものは、James が例の国際的な主題を一時放棄して、自分の周囲のイギリスの社会を描くのに没頭したことのうちに認めることが出来よう。自分の作品に革新が必要であることに気づいた動きとして、James が劇作に移ったことを考え合せてみなければならぬのである。しかも、劇作に失敗した。(この経緯については、拙稿「劇作家としての Henry James」関西学院大学英米

文学会「英米文学」3) Vol. I. No. 2 と「Henry James 1890—50 —— 劇作家時代」関西大学英文学会「英学」4) Vol. I No. 5 に、やや詳しく書いて置いたが) 此の劇作家としての失敗は、そのまま水泡に帰したのではなく、後期の傑作を生み出す大きな役割を果たした事になるので、James が新しい方法を完全に発展させた三大作「鳩の翼」(“The Wings of the Dove”, 1902)、「使者達」(“The Ambassadors”, 1903)、「黄金の碗」(“The Golden Bowl”, 1904) 等に、その劇作の修練の効果があらわれた。James 自身の言葉で云えば、此等の作品は「場景的な」(Scenic)構造をもつことになり、此の構造は人物の内部生活の糸をたぐり、意識の流れの跡をたどることと相交錯して効果を発揮しようとする。例えば、人物の印象を強めるために用いる対話にしても、初期の作品の傾向とは変化をみせる。「鳩の翼」の中の人物の対話は、明かに、「一婦人の肖像」中の対話とはちがっている。対話が人物の性格を表現し、劇の対話中で試みるように、次の場景を用意するために使用されている。又、視点の問題だが初期の一人物の固定された視点からばかりでなく数人の人物の視点を決定することになる。「黄金の碗」の第 1 巻では王子の意識を通して、(即ち Prince の視点から)みられ、それが終ると、第 2 巻は王女の意識を通して(即ち Princess の視点から)みられることになる。王子がドアを開いて、王女に半ば光をあて、王女も亦ドアを開いて王子に半ば光をあてるのである。又、「使者達」ではランバートの視点からばかりでなく、他の人物達の視点からもみられる。又、“Hallucination Theory”⁵⁾の批判をめぐって、色々の立場の批評が展開されている “The Turn of the Screw” (1898)⁵⁾の視点の巧妙さもみのがせない問題であって、物語の情況証拠について長い間、論争をまきおこすことになった此の作品も視点の問題と関係が深い。此の「ねじのひねり」には、三人の話者がいることになる。三人目の話者である主人公の女家庭教師が話をひきうけて、此の物語は此の婦人の視点を通して語られることになる。しかも、一方には、目撃した証人、即ち女家庭教師の一見

論拠の確かな物語りがあり、他方には「心」自体があって、その内容が読者に示されるので、此の作品には、「意識の流れ」の作家達に取り上げられる問題を懐胎しているのである。又、「メイジーの知ったこと」(“What Masie Knew”, 1898)に於ては「意識の小さな器」なる少女の視点を通して、身近の離婚、姦淫の世界がみられるのであるから、どこまでわかったか読者が決定するほかない訳である。

かくして、James は作中人物の内部生活に深く入りこみ、その意識の跡を追求して行くにつれて、普通人の観察では、考慮に値しないと思われるような軽い動機にまで触れ、そして、この微妙な動機を読者に敏感で洗練された、しかし、甚だ難解な(S. Mangham は「羊の角のようにまがった」と云う)文体で伝達しようとする。大抵の読者はまいってしまう。James がむつかしいと云うのは、人物の意識の跡を追求するこのような文体を読み取ることがむつかしいのである。しかもその作中人物を異常なまでに解剖分析し、ほとんど無理強いのように、自分の無意識の領域にまではいきこませる。James の心理小説は、云わば、たえず心のなかで対話が行われている内部描写である。従って、読者も、作者 James と同程度に心理のリズムが最も高い調子を奏でるキイに触れることが強いられる。Robert Humphrey の見解に従えば、James は「言語になる前の状態の意識を全然取り扱っていない」ものであるとすれば、James の小説に扱う「意識」は人物の行動や小説の筋の発展とやはり関連している相関関係にある。James は、あくまで人間の意識の跡を追求し、人間の心理を主とした小説の型をつくったと云うが、又同時に、James の小説は、あくまで、一口に云えば「人間劇」とでも言い得るものである。これは James が、人間の心理を中心としながら、自分の創作するどのような作品でも生の意味を無視することができなかつたからであろう。

Ⅲ

James Joyce (1882—1941) は、二十世紀に於

ける、新心理主義文学の旗頭として文学史に取り扱われており、「ユリシーズ」(“Ulysses”)は「意識の流れ」の小説の大作品として論評されていることは周知のことであるが、此の種の作品を研究する場合に、只、「意識の流れ」とか、Freud の心理主義とかの立場からのみ考察を進めることは弊害をともなうおそれがある。それに、「ユリシーズ」は文学作品として多くの問題をもつものであり、此の小説の興味は、Joyce が取り扱っている人間生活や、人間生活に関する作者の態度であろうと思われる。Joyce 自身も此の作品を単に「方法」だけの興味で創作したものでなからうと思うからである。

けれども、それにもかかわらず、此の作品の特徴が二十世紀初頭までの(心理)小説とは非常に大きな相違があることに読者は気づくであろうし、心理的な理論としてその表現方法を研究することに興味と意義とを発見するであろうと思う。“Ulysses”は初め1918年3月から1920年8月まで、アメリカの The Little Review 誌に、ところどころ掲載されたり、又、The Egoist 誌(Vol. 6. No. 1—5. 1919)にも掲載されたことがあるが、いろいろの曲折のすえ、ついに1922年2月パリの Shakespeare and Company から単行本として刊行されたものである。日本に於ける最初の翻訳は昭和7年2月に岩波文庫本として(分冊として第1が、森田草平、名原広三郎、竜口直太郎、小野健人、安藤一郎、村山英太郎共訳のもので)出版され、最後の分冊第5が昭和10年10月に出版された。昭和4年2月号の「改造」に掲載された土居光知氏の論文は、若い文学研究者に強い刺激となったことを記憶する。又、昭和7年4月には厚生閣書店から、伊藤整氏の「新心理主義文学」と云う論文集が出版された。伊藤氏若き頃の論文集である。広汎な知識と深い理解によって書かれた西脇順三郎氏の Joyce 及び Joyce 文学に関する論文は、後、昭和8年5月第一書房出版の「ヨーロッパ文学」“European Literature”と、昭和9年7月同書房出版の「現代英吉利文学」におさめられた。“Ulysses”は、自伝的な青少年期の自己解剖をあつかった “A Portrait of the

Artist as a Young man” (1916) に続く作品で Homer の “Odyssey” の構成をかりて (話の構造が Odyssey の話の外面的構造をとったもので) Leopold Bloom と云う平凡だが内慾的なユダヤ人の銀行員の1904年6月16日の朝8時頃から晩の2時過ぎ位までの、まる1日にも満たぬ間の記録であるのだが、行動としての事件の記録が少く、所謂、意識の流れの世界と会話の記録が、すばらしく多いのである。物語りは18の挿話が組合わされている。私達の理智の世界は Odyssey のように実は彷徨しているのである。Ulysses は彷徨している近代人の理智の喜劇であるとも云える。朝から晩まで Bloom の生活を潜在心理の内面にまで入りこんで詳細に叙述したもので、心理の連続流動を捕えるために微妙で複雑な文体を使用し、所謂、「意識の流れ」の手法を Joyce が徹底させた作品なのである。出版当時に於いては、その難解な表現と遠慮のない本能描写の理由で、烈しい批判をまねくことになったものであるが、R. A. Scott-James の評言をかれば、「いかに此の作品を嫌おうとも、作品のもつ潑刺とした生氣は疑う余地がないおそるべき作品ではあるが、巨匠の手になるものである。」ので、近代文学の一大実験なのであった。西脇順三郎氏の論評の一節をかれば、「近代意識のあらゆる要素の choreography として偉大なものである。」又、小説全体の構成は音楽的でもあり、「オペラの構成と云うよりも Russian Ballet の構成に類するものである。勿論、話の plot の形式は Homer の Odyssey の parody であるが、内容上の構成は choreography である。」(『現代英吉利文学』第一書房昭和9年発刊) フランスの新心理主義文学の代表者とも云われる Marcel Proust (1871—1922) の考えたような理想的な人間性が構成されて一点に集中されたものでなく、Joyce の場合は、人間性の破片がちらばっていて、理想的な人間性は放散されてしまっている。Ulysses が時間的に混然としているのは、意識の流れをかき立てたからであろう。

今、ここに、創作をすると云う立場から考察された野間宏氏の評論の一部を引用してみる『『ユ

リシーズ』こそは、これまでの如何なる作家も到着することのなかった領域、人間意識の追求をきりひらいたものである。私たちは、このジョイスの探求によって、私たちの意識、大脳のなかに起るいろいろな現象がどのようなものであるかを、明かにすることができるようになったといえる。たしかに私は長い間、このユリシーズに出合うまでは、自分自身の内に働くいろいろなもの、自分の要求衝動、さらに感情、イメージの積み重なり合ったものを、どうとりだしてよいのかわからず、苦しんだのである。ユリシーズはそれをとりだすことを可能にし、それに熱中させた。それは一つの遊戯のようなものになってしまう危険があったが、大きな解放感をもたらしたといえる。更に、野間氏は評論の終りのところで次のように述べて芸術意識の理解を示すのである。「ジョイスは、『ユリシーズ』を完成させることによって、芸術意識こそが、あらゆる意識のうちで、もっとも微妙であり、強烈であり、もっとも速く働き、もっともものろりしており、それ故にそれによって、自分自身の内部のいかなる部分にもさぐり入ることができることを証明した。』⁷⁾

「意識の流れ」は Joyce 以前の文学にも存在するので、例えば、ドストイェフスキイは作品の中でよく無意識の暗冥の混乱を表現しているのであるが、ジョイスが新しいと云うのはその「意識の流れ」を内的独白という直接の表現法によって行ったことにあるのである。「意識の流れ」という描写は心理学的な現実であるかどうかは疑問であるが、Joyce はこれを文学上の記述の上で、知的に精密に描写する技法で行ったのであって、必ずしも心理をそのまま表現することを目的としてはいなかった。従って、発生した意識が独白によって表現されるのである。「内的独白」は人間の語る言葉であるが、作者が介入して説明したり、作者が批判を下したりすることなく、人間の内面生活の中に直接読者を導き入れることを目的とする。聞き手はなくて、言葉が流れて行くのである。意識内容の流れが秩序づけられる以前の意識の動きと云うか、人間の深奥の無意識に近い思想というか、それを表現しようとする。論理的に組

織される以前の思想を、浮ぶままに再現するのである。従って、普通の文法的な英語は、Bloomやその他の人物の心の中に浮ぶ意識内容の流れを表現するのに適していないのであって、単語の羅列や、半ば形づくられた文章や、原文と異なる引用句によって連続的に映像を示すことになるのである。統語法から云えば最小限度の単位に還元された文章になる訳である。かくして Joyce は、人間の生の全体を、外面的な生も、無意識の深奥からほどぼしり出る生も含めて混乱のまま表現する。読者は読解することのむつかしきを感じずことは勿論だが、Joyce の手法によって読者は遂に小説の登場人物の心の中に入ることが出来るようになるのである。Joyce は Bloom の約 1 日の、半ばしか言葉にならぬ印象の涯しない流れを捕えて、厳正な形態をそなえた「ユリシーズ」と云う文学作品を創作したことになるのである。

IV

Ⅰ に於て Henry James, Ⅲ に於て James Joyce の心理小説の特徴をみてきたが、William Faulkner の作品には、此の両者の特徴があわせ用いられていて、Faulkner 独自の型をつくり出している。Faulkner 自身は日本に来た時に、Joyce の影響を自分は受けていない。むしろ、Joyce をコンテンポラリーとみなしていると云ったそうだが、Faulkner は Faulkner としての特徴を發揮したことになる。Faulkner の作品のうちで、此の心理的傾向の強いのは「われ死に臨みて」(“As I lay Dying”, 1930) と「響きと怒り」(“The Sound and the Fury”, 1929) の二作で後期のものにも、しばしば、この手法が利用されている。此の小論では、“The Sound and the Fury” に焦点をあててみる。

Faulkner が作品に示す特異性は人間の意識を通して現実を描く内向的な心理であって、その心理を屈曲して述べる話法である。注意をはらわねばならぬ点は、「意識の流れ」の方法を採用しているが、Joyce と違ってその小説に筋 (plot) があることである。ただし、特に注意すべきはその物語がかたられる時間と場面が前後することで、

物語の発端から結末へと順序立って進行すると云う伝統的というか、従来の小説の形をとらないことである。Joyce の「意識の流れ」の手法と違っていると思われるもう一つの点は、一口に云うと、情緒的 (emotional) に感じられることである。理智で分析しない傾向があり、分析した形よりも生命が生きた全体的な形として意識が流れて行くと感じられる点である。それは心理の分析と云うより、総合としての対象が働き行く人間の生理のようなものである。だから、Faulkner の用いる「意識の流れ」は作中人物の情緒 (emotion) と本能 (instinct) のなかに読者を引き込む種類のものである。このような手法の結果に対して、故志賀勝教授は、明徹な評言を下しておられる。即ち「それは一応『意識の流れ』の方向に出発した作者としては、不徹底な、或は、不純な態度だと考えられようが、フォークナーとしては、彼の通俗性をもこめてそれが自然の行き方であり、同時にこのような生命の働きによって、その煩瑣な手法に、生きた直接的な印象力を与えていることを否定できぬのである。」更に註として、「このような(『意識の流れ』を扱ってさえ) 総合的具体的であることは、アメリカ文学の一つの特性を示すものだろう。ドス・パソスにおいて一層顕著である。」(研究社「アメリカの現代作家」)⁸⁾

“The Sound and the Fury” は、アメリカの南部のミシシッピ州ジェファソンの町の地主遺族 Compson 家の没落して行く約 30 年間の物語である。一団の人々の物語を 4 部に分けることが出来る。第 1 部は April 7, 1928 で 33 才になる白痴の Benjy の独語、第 2 部は June 2, 1910 で長男 Ouentin の独語、第 3 部は April 6, 1928 で次男 Jason の独語、第 4 部は April 8, 1928 で三人称の普通の記事文になっている。第 1 部は、Benjy の白痴の意識を通して物語られるから、その描写の印象はアナキズム的であることは勿論であって、白痴の低い感覚(抽象レベルで最底の意識)で捕えた形を取っているからである。第 2 部は 18 年以前の或る一日の事である。長男 Ouentin の知的で高度な意識を通して描かれる。第 3 部は次男 Jason の意識を通して描かれるのであるが、

Jason は平凡で、俗悪で、非個性的な人物である。今、ここで此の物語を詳細に述べる余裕はないのであるが、前述のように、此の物語は、時間と順序をおって読む小説の場合とは違って、読者のなかには、その曖昧性 (ambiguity) に反感をさえもつ人もあろう。終りまで読んでもう一度整理し直してみなければならぬいめんどろを喜ばない読者は少くないであろう。読むうちにその表現が完全に芸術的なものかどうかと疑う読者もあるかも知れない。だが、読み行くうちに、異常な人間像の生理や意識の働きを捕え、言葉の映像のなかに写して行く頭脳の神経の確かさに感心するであろう。

Faulkner のこのような間接描写の視点の方法は I に於て述べた Henry James の後期の作品に於ける視点の定め方と共通な点があることを認めることが出来る。だから此の点では、Faulkner は根本的には、視点による間接描写を意識化した James の後期の小説技法と同じ立場にあると云えるであろう。或は James の小説技法に従ったとも云える。だが、Faulkner は人物の意識を視点にして、作品の世界を形造ったばかりでなく、James のしたような内部分析 (interanalysis) と云う静的な形でなく、もっと動的な内的独白 (inner monologue) で描写した。この点では Faulkner は James Joyce に甚だ近い。Faulkner は、白痴の男や、精神異常の青年、貧しい農夫や、知的で神経質な大学生からニグロの老婆に至るまで、それぞれの意識をリアリティ (reality) をこめて描き分けた。しかも意識の描写を行うばかりでなく同時に、性格、物語の描写をもしたことは、(此の点 Henry James に甚だ似ている) Faulkner の「意識の流れ」の小説の特徴であろう。作品中の人物の意識の流れを、それぞれ個人の特徴をもつままに表現したことになる。これは一種のリアリズムでもある訳だ。人物の認識作用の相違を典型的に区別して、リアリスティックに描いたと云えるのである。ここまで来て、最初に述べた Faulkner の特徴が Henry James と James Joyce の両者の特徴をかねそなえていることがわかるであろう。

V

ある外国の批評家は Henry James と James Joyce の両者を一線に並べて、Henry James Joyce と、シャレたことがあるが、これは Henry James を現代の心理小説の父と考え、その流れを發展させたのが「意識の流れ」の文学の巨匠 Joyce と云うわけなのだろうが、此のシャレのように、そう簡単には一線につながる性格のものではなからう。これには二つの見方がある。Robert Humphrey (“Stream of Consciousness in the Modern Novel, 1955”⁹⁾ と Leon Edel (“The Psychological Novel 1900—50, 195d”¹⁰⁾ の意見である。Humphrey は、William James の “The Principles of Psychology” 中の意識に関するもの、即ち、「記憶や思考や感情は、第一次意識 (Primary Consciousness) の外側に存在していると云う発見が心理学に携って以来の私の最も重要な進歩であった」と云う Key point から論を進め、又、「意識の流れ」(この表現も、William James が最初に用いたもの) と云う言葉を文学上に濫用することに注意をうながし、Henry James のように「言葉になる前の意識」を、ほとんど文学作品中に取り扱っていない場合と James Joyce の場合とを、厳密な意味に於て区別している。Joyce の扱っている「意識」と云うのは前述のように、意識内容の流れが秩序づけられる以前の意識の動きと云うか、人間の深奥の無意識と云うか、そのようなものを浮ぶままに再現してみせるものなのである。

従って、Henry James の小説は「意識の流れ」の小説と云うカテゴリーのなかへは入れないのである。

だが、Leon Edel のように、小説に於て、経験の内面性を記録すると云う、もう少し広いパースペクティヴからして、此の種の作家の共通面に眼を向けるらば、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳに於て説明した視点と云う立場から考察して、実質的には変っていないと一応みとめることも出来るであろう。例えば、具体的に此の視点の立場から両者の小説を比較してみるなら、丁度 Henry James が初期の

作品では一人の視点を通してているが、後期に於ては、視点が多眼的になって、視点の多様化へと進むのと、Joyce の「若い芸術家の肖像」に於ては一人物の視点を通してているが、「ユリシーズ」となると、視点の多様化が実験されるのとよく似ている。

この二つの意見に対し根本的な解答を与えることは容易な事ではない。此の事を、人間の本质を捕えるため深層心理への探求へと向う近代哲学の問題としてでなく、文学作品に於ける技巧としての「意識」の取り扱い方として考えてみると、或る限界と云ったものを考えない訳にはいかない。事実、Henry James の後期の作品や、James Joyce の「ユリシーズ」等を、一般の読者が、(外国人と云わず、日本人と云わず) どれほど鑑賞し得ているかを思いあわせてみればわかる事であろう。言葉を媒介としている芸術である小説、読者を考慮に入れる小説としては、(William Faulkner が「ユリシーズ」よりも、もっと正直に又有能に「意識の流れ」を利用した作品を創りながら、尚且つ通俗性をも忘れまいとしたことを思いあわせてみれば) 小説に於ける「意識」の扱い方に、何か或る限界と云うものさえあるのではない

かと思うのである。

(1960. 8. 29)

〔註〕此の小論中に於て、直接引用、参考した書名は一応記して置いたが猶、次に整理して書き留める。

- 1) 拙稿「文学に於ける影響の問題—Henry James の場合」関西学院大学英米文学会「英米文学」Vol. IV, No. 1
- 2) 拙稿「アメリカ人をどう読むか—Henry James の場合」関西学院大学「論攻」第7号
- 3) 拙稿「劇作家としての Henry James—“Guy Domville”を中心として—」関西学院大学英米文学会「英米文学」Vol. II, No. 2
- 4) 拙稿「Henry James 1890—50—劇作家時代」関西大学英文学会「英学」Vol. I No. 5
- 5) 「Henry James 作 The Turn of the Screw の研究—所謂 “Hallncination” Theory の批判をめぐって—」関西学院大学英米文学会「英米文学」Vol. 2 No. 1
- 6) 西脇順三郎著「現代英吉利文学」(第一書房昭和九年七月発刊)
- 7) 野間 宏「自分の内部にあって自分ではないものとのたたかい」(伊藤 整編「ジョイス研究」英宝社 昭和三十年七月初版)
- 8) 志賀 勝著「アメリカ現代作家」(研究社 昭和三十三年九月初版)
- 9) Robert Humphrey Stream of Consciousness in the Modern Novel, 1955.
- 10) Leon Edel: The Psychological Novel 1900—500, 1955,

—関西学院大学社会学部助教授—